

# 会報

## 遠藤章博士顕彰会

発行責任者  
遠藤章博士顕彰会  
会長 佐々田亨三  
☎0184-72-2045

### 遠藤章博士のご逝去に当たり 心から哀悼の意を表します

遠藤章博士顕彰会会長 佐々田 亨三



故・遠藤章博士

「奇跡の薬」スタチンを発見された遠藤章博士は令和6年6月5日ご逝去されました。博士の訃報に接し、遠藤章博士顕彰会を代表して心から哀悼の意を表しますとともに、「遺族の皆様には謹んでお悔やみ申し上げます。6月9、10日東京での博士の告別式・葬送儀礼に参加させて頂き、万感の思いを込めてお別れ、お見送りをさせて頂きました。

9月1日は、私も遠藤章博士顕彰会が郷里東由利で、『遠藤章博士を偲ぶ会』を開催致しました。安田秋

田県教育長、湊由利本荘市長、長沼由利本荘市議会議長、秋田県立中央高校同窓会長、東由利中学生会を始め、博士のご息遠藤理様のご臨席を賜り、追悼・お別れの言葉を頂き、また、参列者全員の皆様からは献花を賜り、恭しく、厳かに執り行うことができました。

10月5日には、東京農工大学での遠藤章博士を偲ぶ会に参列しました。追悼の言葉で、東京大学の児玉龍彦医学博士は遠藤博士の、スタチンの発見、そして、安全性へのマウス、鶏、人間等での臨床試験に対する粘り強い研究は降り掛かる苦難に挑戦し、誰もがなかなかった世界的偉業と何度目にも涙を浮かべながら力説され、私は嗚咽しそうになるほど感動の極みでした。

遠藤博士は1933年(昭和8年)11月14日、秋田県由利本荘市東由利法内小倉に誕生し、地元の小・中学校、四年制の本荘高等学校、定時制課程下郷分校に学び、2年後に秋田市立高校(現秋田県立秋田中央高校)に編入し、東北大学農学部に入學、卒業と同時に三共株

式会社(現第一三共)に入社、スクラージS開発の功績で、アメリカに2年間の留学後は、高コレステロール血症治療薬の開発研究に専念、粘り強い忍耐強さと不屈の努力を重ねられて6千株の菌類を調べ、1973年(昭和48年)青カビからコレステロール合成阻害剤スタチン1号となる「コンパクチン」を発見されました。

博士は「秋田の田舎、東由利で育ったから自然の中に血中コレステロールを抑える薬がある」との信念でやっつけてこられた」と語り、郷里への愛着・思いを常に述べておられました。その後の新薬に向けての余りにも多くの苦難は想像を絶するものだったろうと思います。

動物を使った非臨床試験を始め、数々の安全性への試験、分析、検証等、そして、承認申請と審査、それからの発売です。それぞれの担当分野・専門家との協働、一方、「科学的常識等」を巡っての格闘・議論の繰り返し等、再三中止に追い込まれる中にあっても、博士は信念と挑戦、不屈の努力で、新薬に関わるあらゆる分野の研究・検証等をお

ようとする研究を貫いておられたのです。そうした中、アメリカが1987年(昭和62年)、博士のコンパクチンに続くスタチン2号のロバスタチンを、商業化第1号として発売しました。日本でも、1989年(平成元年)日本初のメバロチンとして発売されます。後年、ノーベル生理学医学賞を受賞されたマイケル・ブラウン博士は、「遠藤がスタチンの歴史を開いた」と強調しておられます(「コレステロール代謝に関する諸発見」で1985年ゴールドスタインとともに受賞)。以後研究が広がり、これまでに計7種のスタチンが商業化され、現在では100カ国以上の国々の3000万人を超す患者の治療に用いられています。スタチンは「動脈硬化とコレステロールのペニシリン」、「ペニシリンと並ぶ奇跡の薬」と呼ばれ、さらに冠動脈疾患と脳卒中に加え、スタチンがアルツハイマー病等を予防することも示唆され、スタチンは「万能薬」とも言われております。

遠藤章博士は後に、東京農工大学で教鞭を執られ、同大学名誉教授、そして(株)バイオファーム研究所代表取締役所長として活躍されるなど、創薬の研究開発に生涯を尽くされました。これら希有な世界的偉業により、遠藤章博士は日本国際賞、ラスカー賞、ガーンダー国際賞等を受賞し、「米国発明家殿堂入り」、そして、文化功労者、旭日・瑞宝重光章に輝いております。

遠藤章博士は、幼少の頃から親しんだ家畜、カビとキノコ、農作業等自然との触れ合いを通して、「自然を大事にし、自然に求め、自然からの贈り物として自然から学ぶ」を、研究開発の原点と話されたことや、導いてくれた郷里の家族や恩師への感謝の言葉、そしてハーバード大学のブロック博士には、博士が亡くなる90年代半ばまでの30余年間、折に触れて励ましと指導を受けられたこと、「博士との出会いがなければ、私がコレステロールにのめり込むことは恐ろしくなかったであろう」との述懐は胸に迫ってくるものがあります。私達顕彰会は博士の自然を大事にし、「自然から学ぶ」不屈の粘り強い努力で成し遂げた偉業・業績を、地域・県民を始め多くの人々に語り、伝える使命とでも言うべき責任があります。同郷・地域として、同職・研究者としてのよしみからだけではなく、博士の人命を救う研究開発の動機と臨床試験等への情熱、そして数々の難題・課題克服のための粘り強い努力と果敢なる挑戦には、必ずや万人の心を傾注させることを確信します。

博士は未来のある学徒中・高校生に、いつも努力について語ってくれました。「世界を広く見渡して学び、大きな目標・夢に向かって努力を続けよ、努力は必ず報われる。」遠藤章博士の遺訓として、未永く語り伝えていく所存です。

2024年10月5日、東京農工大学の農学部本館講堂にて「偲ぶ会」が行われ、佐々田会長と共に参加させていただきました。

出席者はご遺族や大学関係者、卒業生、修了生、共同研究者、秋田の関係者など約120名が集まり最初に全員で黙祷を捧げ、博士のご冥福をお祈りいたしました。

続いて、発起人代表の連見恵司・農工大特任教授が主旨を説明し、千葉一裕・東京農工大学学長、富永悌一・東北大学学長、湊貴信・由利本荘市長が博士の功績を称える挨拶をされました。さらに、以下の4氏による追悼講演が行われました。

最後に、今回の「偲ぶ会」では、農工大の皆様が受付や案内、会場の設営などを全て担当してくださり、大学関係者や業界を代表する多くの方々から博士を偲ぶ声が寄せられました。

秋田から参加した私たちも、章博士の偉大さを改めて感じる事が出来ました。ここに大学関係者の皆様から感謝申し上げます。ご報告と致します。

### 東京農工大学「遠藤章先生を偲ぶ会」 遠藤章博士顕彰会顧問 遠藤正悦

向・公表されなかったスタチン発見の経緯」  
▼武淵明裕夢・遠藤章奨学金奨学生「脳における細胞外マトリクスの機能解析」  
引き続き、海外で親交のあった方々からのビデオメッセージが司会者の鈴木絵里子・農工大教授によって翻訳を交えて紹介されました。また、佐竹敬久・秋田県知事から

も名誉県民である博士の功績を称え、ご冥福をお祈りするメッセージが寄せられました。

第2部では、同じ農工大のキャンパス内の会場に移動し、和やかな雰囲気の中で博士の奥様が、真面目で几帳面な日常生活についてエピソードを交えながら思い出を語って下さいました。

その後、博士と親しい方々からお話があり、佐々田会長からは秋田の顕彰会の活動や顕彰碑についてお話をいただきました。

最後に、今回の「偲ぶ会」では、農工大の皆様が受付や案内、会場の設営などを全て担当してくださり、大学関係者や業界を代表する多くの方々から博士を偲ぶ声が寄せられました。



東京農工大で行われた「遠藤章先生を偲ぶ会」

### 顕彰会会務報告

(令和6年1月～12月)

- 3月 6日 地域貢献事業 (東中卒業生へ記念品贈呈)
- 4月10日 会計監査
- 5月 2日 第1回事務局拡大会議
- 6月 1日 理事会
- 6月22日 総会
- 7月 2日 第2回事務局拡大会議
- 7月30日 第3回事務局拡大会議
- 8月27日 第4回事務局拡大会議
- 9月 1日 遠藤章博士を偲ぶ会
- 9月10日 第5回事務局拡大会議
- 10月 5日 東京農工大学「遠藤章先生を偲ぶ会」に佐々田会長出席
- 10月 5日～27日 故・遠藤章博士追悼展示
- 10月29日 第6回事務局拡大会議
- 11月13日 講演会(土田昌一先生)
- 12月14日 第7回事務局拡大会議 追悼集・会報第5号発行・発送

### 会費・協力金・寄付金等

(令和6年11月末日現在)

会費 296,000円  
寄付金 40,000円

# 動脈硬化予防など学ぶ

## 医師会病院土田副院長が講演

遠藤章博士顕彰会が、遠藤章博士が発見した血液中のコレステロールを下げる物質「スタチン」の効用や、動脈硬化の予防法について理解を深めてもらおうと、今年も「講演会」を、11月13日市文化交流館カダレで開催しました。

講師には由利本荘医師会病院の土田昌一 副院長を迎え、「動脈硬化症疾患に対する外科治療」をテーマに講演していただきました。

血液中の悪玉コレステロールが増えると血管に付着し、動脈硬化を起こして血管が詰まりやすくなるため、スタチンの利用が治療に役立つことを説明しながら、遠藤章博士のスタチンの発明は「心臓学における業績のトップテンに入る」とも話しました。

また、動脈硬化の予防のためには、▼マーガリンなどに含まれる「トランス脂肪酸」を押さえる、▼喫煙を控える、▼野菜を多く摂るなどをあげ、足の血管が詰まる「閉塞性動脈硬化症」の治療法として、患部の血管を人工管に置き換える外科手術を行っていることも

紹介しました。

参加者は40人余りで、佐々田三顕彰会長は開会のあいさつで、「高い志と努力で研究を進めてきた遠藤博士の功績をたたえ、これからも顕彰していきたい」とあいさつしました。

講演終了後質問の時間が設けられ、「血管を健康に維持するためにはどんな方法があるか・」の質問には、「特別な方法はないが、適度な運動と野菜を多く摂ることなどは効果があるのではないかな」などと温かく応えてくれました。



11月13日市文化交流館カダレで開催した講演会

# 顕彰会総会を開催



6月22日に開催した顕彰会総会で懇話する会員

遠藤章博士顕彰会の本年度の総会を6月22日、有鄰館で開催し、追悼行事の開催などを決めました。

総会には会員20人が出席、冒頭で遠藤章博士の遺影の前に全員で黙とう。総会に先立ち佐々田会長が、遠藤章博士が「郷里での多くの経験が研究へと進んだ原点だった」と強調していたことを踏まえ、「遠藤章博士の業績を伝えていくことが、未来を生きる子どもたちの力強い支えになってほしい」とあいさつしました。

# 「偲ぶ会」9月1日に開催



9月1日「遠藤章博士を偲ぶ会」で献花する出席者

遠藤章博士を偲ぶ会を9月1日有鄰館で開催、県内外から親族や教育関係者ら約60人が参加し、これまでの功績と人柄を偲びました。

祭壇には遠藤章博士の遺影を飾り、冒頭、遺影の前に全員で黙とうをささげました。

佐々田会長は主催者あいさつで、「遠藤先生は未来ある中高生にいつも努力の大切さを語ってくれた。『若人よ、広く世界を見渡して、大きな目標に向かって努力を続けよ。努力は必ず報われる』。この言葉は私たちにとって永遠の遺訓で、末永く語り伝えていく」と述べました。故人の紹介、追悼の言葉に続き、参加者が1人ずつ献花台に白い花を手向け別れを惜しみました。



講師の土田昌一由利本荘医師会病院副院長

遠藤章博士死去で地元紙の秋田魁新報は、6月12日朝刊のトップ記事に大きく掲載したほか、北斗星、社会1面、社会2面に

加え、増ページに写真6枚を使用し功績を紹介し、逝去を悼みました。

それぞれのタイトルは、▼スタチン発見ノーベル賞

有力視・遠藤章さん死去▼不屈の努力たたえたい・古里顕彰会会長ら悼む▼遠藤章さん死去・研究の原点東由利に▼困難乗り越え開

いた道・遠藤章さん死去▼社説「多大な功績たたえたい」▼北斗星（故小松順之助先生のことなども紹介）など、偉大さを感じます。

なお、遠藤章博士の逝去については、他にも河北新報などの新聞、テレビ等で広く報道されましたことをご報告いたします。

### 編集室から

▼逝去を報じた6月12日の秋田魁新報を見て、その扱ひの大きさに驚くことも遠藤章博士の偉大さを改めて思い知らされました。近年病気がちなことは聞いていましたが、亡くなったという事実にはショックでありませぬ▼講演会で土田先生は健康寿命にも触れ、健康維持のためには体を動かすことが基本で、食べ物もスナック菓子のようなものは控えた方がよいことを教わりました▼歩くだけでも健康に良い影響を与えるようですが、最近では寒くなり散歩に出るのも億劫な自分が情けない頃です。（広報担当・小野）

秋田魁新報 2024年06月12日付 社会2

## 遠藤章さん死去

### 評伝

「今年はずきり遠藤先生の黄だと思っていた。人工多能性幹細胞（iPS細胞）を開発した山中伸弥京都大教授の場に（研究仲間）遠藤が



出羽中学校を訪れ、理科の実験の様子を見守る遠藤さん（中央）＝2012年6月

# 研究の原点 東由利に

遠藤章さんの足跡	
1933(昭和8年)	▶由利郡下郷村(旧東由利町、現由利本荘市)に生まれる
49(昭和24年)	▶本荘高下郷分校に入学
51(昭和26年)	▶秋田市立高(現秋田中央高)に編入
53(昭和28年)	▶東北大農学部に入学
57(昭和32年)	▶製薬会社「三共」(現第一三共)入社
71(昭和46年)	▶同社発酵研究所に配属。約6千種のカビとキノコを調べる
73(昭和48年)	▶青カビから「スタチン」の第1号となる「コンパクチン」発見
78(昭和53年)	▶患者にコンパクチンを投与し、効果が表れる
79(昭和54年)	▶東京農工大農学部助教授に就任
81(昭和56年)	▶「コンパクチンは患者のコレステロール値を下げる」という研究論文が米国の権威ある医学誌に掲載
87(昭和62年)	▶米大手製薬会社「メルク」がスタチン製剤を世界で初めて商品化
97(平成9年)	▶東京農工大を定年退官。バイオファーム研究所(東京)を設立
2000(平成12年)	▶米ハーバード大医学部の「ウォーレン・アルバート賞」受賞
06(平成18年)	▶国際科学技術財団の「日本国際賞」受賞。名誉国民
08(平成20年)	▶米医学界最高栄誉の「ラスカー賞」受賞
11(平成23年)	▶文化功労者
15(平成27年)	▶全米脳質協会が「遠藤章賞」を創設
17(平成29年)	▶医学の分野で重要な発見をした科学者対象のカナダ「ガードナー賞」受賞

いないのかと述べたという。名だたる受賞者が深く敬意を表した通り、由利本荘市東由利出身の応用微生物学者、遠藤章さんは紛れもなく「1ベル賞に最も近い科学者の1人」であった。

73年夏に青カビから血中コレステロール値を下げる物質を発見。この物質を基に開発された薬は「スタチン」の第1号となった。やがて世界で最もよく使われる医薬品となり、遠藤さんは2008年に米国立特許権威のある医学賞「ラスカー賞」を受賞した。

輝かしい功績の原点は郷里の東由利にあった。農家に生

まれ、少年時代は山や川での遊びに明け暮れた。ある日、地元で自生するハエトリシメジというキノコに関心をもち、「人が食べても問題ないのに、なぜハエがたかると死んでしまうのか」。少年が抱いた素朴な疑問は、カビやキノコに対する興味となり、その後の研究へとつながっていった。「育った環境が（研究に与えた影響は）大きい」。11年度の文化功労者に選ばれた際、そう振り返っていた。

定時制の本荘高下郷分校へ進むと、周囲から「あいつは農作業を手伝うのが嫌で、サボるために学校へ行くんだ」と言われた。だが、肝臓への毒性

だ」とやゆされ、わざわざ山道を通って隠れるように登校。学友への意欲は「必ず、必ず薬になる」と信念を貫き通した。自ら動物実験に挑むなどひたむきに研究を継続。その努力はやがて実を結ぶことになり、米国の製薬大手が遠藤さんのサンプルやデータを基に研究を進め、1987年にスタチン製剤の開発に世界で初めて成功した。

遠藤さんは12年前、科学研究が盛んな由利本荘市の出羽中学校（現大内中）を訪れたことがある。

「自然と人間の体、心は不思議なところだらけ。何かに興味を持つことで目標が生まれ、努力が始まる」「信念を持って一生懸命やっていたら、周りも助けてくれるし、幸運にも巡り合える。挑戦と失敗を繰り返してこそ成功に近づける。かんで含めるように発せられたメッセージを、生徒ははきらかに目を輝かせて受け止めていた。

遠藤さんの模範とする研究への情熱が、郷里の若い世代へとバトンのように引き継がれた瞬間を目の当たりにした気がした。（小松嘉和）